

史料の共有と地域の歴史

——研究大会初日個別報告(後半)——

弘末雅士

現地に限られた数しかない貴重な史料がデジタル化によって広く共有されることの重要性は、以前から指摘されてきた。またジャウイのデジタル化は、スキャンした画像データを文字として読み取ることが困難で、ジャウイをローマ字情報に転換する作業が欠かせない。青柳枝里子氏は、19世紀後半にシンガポールで刊行された新聞『ジャウイ・プラナカン』の記事ごとの書誌情報をPDFの注釈として付加し、また1950～60年に発行された月刊誌『カラム』のローマ字版翻字により、ジャウイ表記の記事のローマ字による検索が可能になった事例を紹介した。また2004年のスマトラ沖地震以来大規模な自然災害の発生しているインドネシアで、大量に収集された新聞記事の情報(『インドネシア自然災害新聞記事データ』)を、発行日・誌名・記事リスト・執筆者・第一段落の内容・地名の項目別にまとめることで、同様に検索可能であることを示した。

デジタル化によるインターネットでの資料検索が可能になることで、研究環境は飛躍的に向上する。他方で、大量のテキストが利用可能になることで、テキストをとりまくコンテキストの理解をいかに追いつかせるかが重要になる。これまでの現地に赴いて現物に接して調査した場合には、いかなる場所に保存されているか、いかなる紙でできているのか、どんな印刷なのか、同誌には他にどんなことが掲載されているのかが理解できた。これからは、デジタル化されたデータとそれらをいかに接合させるか、検討されるべき課題を提示した報告でもあった。

黒田景子氏の「タイ＝マレーシア国境の越境者社会：クダー州内部地域のタイ語話者社会と沿岸政権としてのクダースルタン王国」は、南タイ出身のクダー内陸部におけるタイ系住民の存在とクダース

ルタン王権との関係、その現在の状況について検討した。クダーは、19世紀末までシャムに朝貢したマレーイスラム侯国であり、歴史的にも南タイとの交流が盛んであった。現在クダーの内陸部には、タイ語話者のサムサムと呼ばれるマレームスリムと、タイ語話者の上座仏教徒のシャム人が居住する。ともに内陸部の河川流域周辺で灌漑による水田耕作を営む。上記のシャム人は、パツタルンやソングラ、パタニからの移住伝承を有し、18世紀末頃の南タイの戦乱や疾病からの南下移住者の末裔ではないかと推測される。クダーにはタイ語に起源をもつ地名が多く、また20世紀半ばまで人々の半数がタイ語を理解できていた。一方、沿岸部にはスルタン王家が存在するが、その影響力は周辺海域世界や沿岸部のマレー人ムスリムに限られ、内陸部のサムサムやシャム人に対してはさほど強くない。

植民地支配の枠組が持ち込まれると、英領となったクダーのシャム人はシャム王国から分断された。またマレーシアの成立以降、マラヤ共産党弾圧のため、国境付近の内陸部に居住したサムサムやシャム人は強制移住の対象となった。クダーのシャム人の集落に上座仏教寺院が存在するが、タイのサンガとの組織的な関わりはないことが示された。こうした状況下で、沿岸部のマレー人ムスリムと内陸部住民との接合役として華人系住民が経済的文化的に重要な役割を担っていることが明らかにされた。

黒田氏は、植民地経験をもつ国民国家的視野から離れ、国境で途切れない地域歴史の視野の必要性を提起する。近現代の華人系住民のように、かつてはサムサムが沿岸部のマレー人とシャム人との間を仲介したことを想起させる興味深い事例が提示された。